



Title	ポルトガル語における外来名詞の複数標識
Author(s)	鳥居, 玲奈
Citation	ブラジル研究. 2010, 6, p. 33-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106518
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポルトガル語における外来名詞の複数標識¹

鳥居 玲奈

1. はじめに

Mateus e Nascimento (2005)は、外来語²がヨーロッパのポルトガル語（以下 EP とする）の語彙体系に同化される過程を調査し、外来語が初めて EP に導入されてから完全に語彙体系に統合されるまでの段階を音声（音韻）、形態・統語、意味、表記上の規準にしたがい3段階に分類している。

第1段階

- (i) 音声上の即時適応—借用元言語(*língua doadora*)と借用先言語(*língua receptora*)の間に対応する音が欠如している場合、すでに存在する音により置き換えられる。
- (ii) 形態・統語上の即時適応—文法性の付与と品詞の維持。
- (iii) 語の単義性—外来語が借用元言語において有する複数の語義のうち、いずれか1つの語義が維持される。
- (iv) 借用元言語での表記の維持。

(v) 引用符やイタリック体の使用による外来語に対する躊躇の表れ。

第2段階

- (i) 音声上、形態・統語上の適応の進行—アクセント位置の変化や子音の単純化など。また、**mails** や **commons** に見られる英語起源の名詞や形容詞の借用元言語での複数形の維持。
- (ii) 外来語を語基とする新たな複合語の形成や接頭辞による派生語形成の可能性。
- (iii) 借用元言語での語形と異なる表記の現れ。

第3段階

- (i) 音韻面での定着—アクセント記号の定着。
- (ii) 形態・統語上の完全な統合—文法性と単数形・複数形の定着。
- (iii) ポルトガル語の形態体系への統合—接尾辞による派生語形成の可能性。
- (iv) 多義性—語義の拡大傾向。

上記モデルの形態・統語上の規準だけに焦点を絞ると、名詞が他言語から導入された場合、次のような過程を経てポルトガル語の語彙体系に統合されるということになる。まず第1段階では、借用元言語で名詞であったため借用先言語でも同じ品詞として用いられ、さらにポルトガル語の形態・統語規則に基づき文法性が付与される。続く第2段階では、借用元言語での複数標識が維持されるとともに、複合語の形成や接頭辞による派生語の形成が行われる。そして、最後の第3段階において、名詞の文法性と複数標識が定着し、外来語を語基とする接尾辞付加による派生語の形成が行われる。

このモデルでは、ある外来名詞がEPに導入されると、文法性の付与は初期の第1段階で行われると明示されているが、複数標識についてはその後の第2段階で初めて言及されている。そして、いずれの文法範疇も定着し始めた段階で第3段階に属するのだと判断されている。この記述から、**Mateus e**

Nascimento (2005)では、文法性の付与と数の現れは同じ段階で起こらないと見なしていると解釈できる。

この外来語の複数標示に関して、我々の調査したコーパスでは、Mateus e Nascimento (2005)のモデルと同様の結果が得られなかった。つまり、文法性と同様に複数標識も初期の段階で頻繁に観察されたのである。そこで、本稿では、外来語の複数標識は上記モデルの第1段階で付与されるのではないかという仮説を立て、コーパスのデーターを基に仮説の検証を行うことを目的とする。

本調査で用いたコーパスは、女性ファッション雑誌 *Vogue Brasil*, *Vogue Portugal*, *Elle Brasil*, *Elle Portugal* の4誌であり、そこから収集された英語とフランス語起源の外来語を分析の対象としている。Mateus e Nascimento (2005)ではEPが調査の対象となっていたが、本調査ではEPだけでなく、ブラジルのポルトガル語（以下BPとする）のデーターも含めて分析する。

本稿の構成は次の通りである。次節で先行研究をもとに名詞の数の概念について考察し、3節でコーパスのデーター分析を行う。そして最終的に分析結果から4節の結論へと導いてゆく。

2. 名詞の文法数

Alves (2002:81)では、ブラジルの新聞や雑誌における外来語の複数形は、一般的に借用元言語の数の屈折規則にしたがって変化し、すでにポルトガル語に同化している名詞は、ポルトガル語の形態規則に則って変化すると述べられている。一言で同化といえ、そこには様々な段階が想定できるであろうが、ここで Alves のいう同化とは、ある外来語が完全にポルトガル語の語彙体系の一部を成すことを意味しているものであろうと推測される。したがって、外来語がまだ導入されたばかりの初期段階では、借用元言語の複数標識を維持するが、音声や表記上の同化の度合いが進むとともにポルトガル語の形態規則が適応されるようになるということであろうと理解できる。

同様の記述がBiderman (2001:212)にも見られる。例えば *best-sellers*, *campings*,

cow-boys, experts, gangsters, hobbies, jeans, play-grounds, posters などのように、外来名詞の複数形は、借用元言語の複数形がそのまま維持される頻度が高いことが指摘されているが、例えば、gol の複数形である gols と gois のように、場合によってはポルトガル語の形態規則によって形成された複数形と併用されることもあると述べられている。

両者の記述から、外来名詞の複数形態素は借用元言語の形態規則によって導かれるが、その語が借用元言語への同化が進むと新たな形態規則が適応される可能性があるということが言える。しかしながら、これだけでは複数標識がポルトガル語の語彙体系に導入されるどの段階で付与されるのかが明確ではない。これらへの先行研究は、もともと数という文法範疇を持つ言語に由来する外来語を対象に記述されたものであり、例えば日本語のように数の文法範疇を持たない言語からの外来語については一切言及されていない。そのため、まずは数という概念から考察していきたいと思う。

『言語学大辞典』(1996)では、数は次のように定義されている。

物がいくつあるか、事が何回おこったかということは、言語生活の中では絶えず問題になることである。そして、数そのものは、どの言語にも数詞という特別の語群があつて、それで示されるが、ここでいう数とは、文法範疇としての数のことである。[中略] 英語の不可算名詞は本来数えられないものであるから、単数：複数の区別はできないわけであるが、英語の名詞は、数に関しては、単数が複数かどちらかでなければならぬので、そのいずれかを選ばなければならない。その場合は、マークのない単数を用いるのが普通である。(亀井孝・河野一郎・千野栄一編著『言語学大辞典第6巻術語篇』三省堂、1996年、p.765-p.766)

上記の定義から2つのことが読み取れる。1つは、文法範疇としての数(以下、文法数とする)は意味上の数(以下、自然数とする)と区別されているということである。例えば、ポルトガル語の *multidão*, *povo*, *gente* といった名

詞は、意味上は複数の人々を表しているにもかかわらず、文法上は単数扱いであり、反対に *óculos, meias, sapatos* のように、対象物は1つと数えられていても文法上は複数形で表現される場合がある。このように、自然数と文法数は必ずしも一致するわけではないため、両者は異なる概念として区別される必要がある。

もう1つは、単数と複数の別はそれぞれ無標と有標の対立として捉えられるということである。複数形が有標と呼ばれるのは、単数形に対して形態素という標識を付与することにより形成されるためであるが、何の断りもない場合、つまり何の標識もない場合は必然的に単数が用いられるということになる。したがって、英語やポルトガル語のように文法数の区別が必須である言語では、自然数がいかなる場合であろうと、必ず名詞に無標の数か有標の数の別が標示されるということも上記の定義から読み取れる。

この二項対立的視点から Câmara Jr. (2002)はポルトガル語の名詞の文法数を定義している。これまでの伝統文法の枠組みでは、名詞の複数形の形成を記述するにあたり複数の規則を設定しなければならなかったのに対し、単数と複数を無標／有標と捉えることでその記述がより簡潔となる。その規則とは、単数形に複数形態素-sを付加するというものであり、Monteiro (2002)もこのCâmara Jr.の考えを受け継ぎ、ポルトガル語の名詞の複数標示を以下のように分析している。

vítima + -s = *vítimas*

mesa + -s = *mesas*

しかし、実際は全ての名詞が上記のように単純な等式で示されるわけではなく、場合によっては、以下の例のようにアスタリスクで示された理論上の形式を設定する必要があるなど、Câmara Jr. (2002)の考えを立証するには考慮すべき点は他にもあるが、その詳細については本稿の主旨からは外れるためここでは触れないことにする。

mar→*mare+-s=mares

いずれにしても、Câmara Jr. (2002)の視点からポルトガル語の複数形は複数形態素-s、単数形はその標識が欠如しているという意味でゼロ形態素によって標示されるという点はいかなる名詞にも共通している。ここでは最も単純明快な例を用いて単数と複数の関係を示すと以下のような対立等式が成り立つ。

単数：casa + ϕ = casa

複数：casa + -s = casas

ところで、単複同形の lápis や simples のように語尾が-s で強勢が最後から2番目の音節にある語は、Câmara Jr. (2002)によると、-s のゼロ異形態を設定することで説明がつくという。その場合は、単数形と複数形が表層上同形になるため、その前後につく修飾語の数の照応といった統語上の規準から単数が複数かが判断されることになる。しかし、下記の例に見られるように、ゼロ異形態を設定することで、表層上は同じ lápis であっても、上の lápis と下の lápis は異なる性質を有していることが分かる。

o lápis preto

os lápis ϕ pretos

このように、一見ある名詞に複数標識が欠如しているように見えても、一方は無標でもう一方はゼロ異形態という不可視的要素が有標として存在していると捉えることができる。前節で見た Mateus e Nascimento (2005)のモデルで複数標示が第2段階に加えられたのは、次のようなケースを考慮した結果ではないかと推測される。ここでは、現代のポルトガル語で最も多い英語起源の外来語を例に考えてみる。

(a) um iPod

(b) dois iPod

しかし、このような場合でも、一般的には、動詞との照応は複数になると考えられる。

(a') Um iPod foi vendido.

(b') Dois iPod foram vendidos.

(a)と(b)の iPod は表層上同形ではあるものの、以下の(b'')に示すように、借用元言語である英語、または借用先言語のポルトガル語の形態規則により①の複数標示の-s が付与されるか、あるいは②の異形態としての ϕ が付与されるかといった2つの可能性を備えているという理由から両者は異なる性質を持つと考えられる。

(b'') dois iPod ①-s

② ϕ

したがって、表層上、外来名詞が複数標示を持たないように見えたとしても、そこには単数形と同じように複数標示-s が存在しないのではなく、存在する余地はあるがたまたま何らかの理由で複数標識-s の異形態 ϕ が暫定的に選ばれているだけで、同化が進み複数標示の定着までに-s として現れる可能性は十分備わっていると言えるであろう。

どのような理由から異形態 ϕ が選ばれるのかは一概に1つの要因に断定することはできないが、基本的には、借用元言語あるいはポルトガル語の形態規則にしたがい①であるより規則的な複数標識が優先的に選択されるが、外来語の使用者が外来語に対して何らかの反応を示した場合には②が選択され

るのではないかと考えられる。それは、外来語に対するためらいといったような言語外の要素が働いている場合や借用元言語と借用先言語の複数標識の相違が大きい場合などに起こる選択肢ではないかと思われる。

また①の複数標識についても、基本的にポルトガル語と類似した複数標識を持つ言語からの外来語の場合は借用元言語の複数標識を維持する傾向が高く、反対に文法数に対する概念がポルトガル語とは異なる言語に由来する外来語では、借用先言語であるポルトガル語の複数標識-s が優先的に用いられるのではないかと推測される。

このように、ある外来名詞がポルトガル語に導入されると、同化の程度がいかなる場合であろうと、単数／複数の区別は必須となり、その語の自然数が複数である場合や借用元言語での文法数が複数である場合には必然的に有標の数が選ばれ、その方法として本来であればより規則的な複数標識が付与されるが、借用元言語での複数標識がゼロ異形態である場合や、心的要因が働く場合には異形態ϕが選ばれるのではないかと考えられる。したがって、文法数は外来語の初期の導入段階で付与されると考えて良いのではないかと思われる。

次節よりコーパスのデーターを分析してゆくことにする。

3. 分析結果

ブラジルとポルトガルで発行された女性ファッション誌 *Vogue Brasil* (VB), *Vogue Portugal* (VP), *Elle Brasil* (EB), *Elle Portugal* (EP) から収集したフランス語と英語起源の外来語を調査した。ファッション分野においては、ポルトガル語では英語とフランス語起源の外来語が数量的に多いため、両言語に由来する外来語の複数形を調べることにした。

本調査では、ファッション関係の語に限定せず、それぞれの雑誌で取り上げられていた、化粧品、装飾品、美術、音楽、映画、旅行、料理、スポーツ、インタビューといったあらゆるテーマにおける外来語を分析した。なお、対象となった雑誌の総数は 29 冊で、収集期間は、2003 年 12 月から 2004 年 8

月までである。

ポルトガル語の語彙体系にまだ統合されていないとされる外来語がいくつかの方法で文法数を標示するのかを観察するため、ブラジルのポルトガル語辞典 *O Novo Aurélio Século XXI: o Dicionário da Língua Portuguesa* (1999)と *Dicionário Houaiss da Língua Portuguesa* (2001)、ポルトガルのポルトガル語辞典 *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea da Academia das Ciências de Lisboa* (2001)と *Grande Dicionário da Língua Portuguesa* (2004)に記載がない語、あるいは外来語の表記や何らかの形態的特徴が辞書の記載と異なる語だけを抽出し、それらを分析の対象とした。その中から複数標識の有無や前後の修飾語から単数(SG)／複数(PL)を分類した結果、それぞれの雑誌から収集した単数形／複数形それぞれの数と総数に対する複数形の割合は表1の通りであった。

表1：VB, VP, EB, EP における複数形の総数

	英語	仏語	総数
	SG / PL	SG / PL	SG / PL
VB	199 / 64(24%)	55 / 16(23%)	254 / 80(24%)
VP	161 / 72(31%)	59 / 18(23%)	220 / 90(29%)
EB	69 / 27(28%)	13 / 1(7%)	82 / 28(25%)
EP	76 / 35(32%)	6 / 7(59%)	82 / 42(34%)
総数	505 / 198(28%)	133 / 42(24%)	638 / 240(27%)

*括弧内の数値は単数と複数の総数に対する複数形の割合（％）を示す。

この数量結果を見ると、外来語が複数標識を伴って用いられていた用例は

EB のフランス語起源の外来語を除くと、いずれもおよそ全体の 4 分の 1 ほどの割合で観察された。次項よりこれらの用例を Mateus e Nascimento (2005) のモデルの 3 段階に分類し、複数標識がどの段階で標示されているのかを見て行く事にする。

3.1 英語起源の外来名詞の文法数

英語起源の外来名詞の大部分は、イタリック体の使用や原語の表記の維持などの理由により、Mateus e Nascimento (2005) のモデルの第 1 段階に属していると判断された。以下にいくつかの用例を挙げてみる。

- (1) 120 department stores e butiques selecionados. (VB 311.34)
- (2) “Somos vendidos exclusivamente nas nossas lojas, não em duty frees e (...) (VB 306.72)
- (3) (...) o Verão parece querer entrar nos backstages. (VP 17.112)
- (4) (...) tudo o que “tia” eram os comic books da Marvel... (VP 22.60)
- (5) (...) e dão palpite sobretudo em blogs – diários virtuais que transformam qualquer internauta em protagonista de novela. (EB 8.65)
- (6) Pode ficar a par da evolução dos books dos modelos (...) (EP 186.42)
- (7) (...) e as heroin-chic incendiaram a publicidade. (EP 191.101)
- (8) As novidades das very important people (...) (EP 186.80)
- (9) (...), apenas para uns “happy few”. (VP 15.10)

しかしながら、次の用例のように第 2 段階の特徴であった表記の変化(10)、(11)、複合語・接頭辞による派生語を形成(12)や第 3 段階の特徴であった接尾辞による派生語の形成(13)、(14)、(15)などもわずかではあるが観察された。

- (10) O que a deixa de mau humor? Wanabes, arrogância. (VB 311.10)
- (11) (...), influenciada pelo sportwear, (...) (VP 18.88)

- (12)(...): ele e outros “anti-Bushianos”, (...) (EB 3.96)
 (13)Modernos, antenados clubers, skatistas, todas as tribos, (...) (VB 312.34)
 (14)Cansadas de nossas sainhas, blusinhas, topzinhos, (...) (VB 310.26)
 (15)(...), coletânea com pensamentos inspirados de 11 blogueiros. (EB 8.65)

第1段階に属するとされるほとんどの名詞の複数形は、(1)から(6)に見られるように、Alves (2002)や Biderman (2001)の記述通り英語の形態規則にしたがって形成されていた。また(7)から(9)の用例でも、複数標識-s は見られないものの、統語関係から複数の性質を持つことが確認できた。これらは、英語の形態規則により異形態ϕが選択されたため、表層には現れていないと考えられる。

ところが、次の用例をみると、本来英語の形態規則が適応され *trenches* となるはずであるが、規則的に複数標識-s だけが付与されていたものも観察された。

- (16)(...), tem os trenchs como fiéis companheiros. (EB 4.26)

一方で、借用元言語では複数標識-s を伴うはずが、ゼロ異形態が選ばれていたため統語関係により複数の性質を持つと判断できた名詞もあった。しかし、それは以下の3例だけであり、全体の割合からするとほんのわずかであったことが分かる。

- (17)A russa Natalia Vodia nova, atual número1 no ranking das top, mostra a que veio na campanha da L'oréal (VB 307.14)
 (18)(...) e os meus sexy-girl de Giuseppe Zanotti. (VP 15.125)
 (19)Destaque para as carteiras, desde as clutch às extra large. (EP 186.42)

3.2. 仏語起源の外来名詞の数

フランス語起源の名詞も英語起源の名詞と同様に、原語の表記が維持されていることや、引用符やイタリック体といった表記上の施しがされていることから、第1段階に属すとされる語がほとんどであった。以下にいくつかの用例を挙げてみる。

(20) Circulando pela loja, você passa pelas bijoux da *stylist* Chiara Gadeleta, (...) (VB 306.50)

(21)(...), confeccionados em linho, chamoix e argolas de bronze. (VB 312.145)

(22) Inspirado nos elegantes châteaux da França, (...) (VB 311.215)

(23)(...) o *Kapani Lodge* é composto por chalets espaçosos (...) (VP 22.137)

(24)(...), as gîtes, ou casas rurais para se hospedar: (...) (VB 312.33)

(25) Ralf Schweiger e Natalie Feisthauer foram os nez (ou perfumistas) (...) (VP 18.130)

(26) pequenas pochettes e carteiras em tela (...) (VP 16.28)

(27)(...) vestido bordado a paillettes e corais, (...) (EP 186.178)

これらの用例からも分かるように、フランス語の形態規則に則って複数標識が付加されていた。例えば(20), (21), (22)では *bijou*, *chamoix*, *château* が単数形であるが、それぞれ *bijoux*, *chamoix*, *châteaux* と変化しているということから、フランス語の規則により複数標識が付与され、それがポルトガル語でもそのまま用いられているということがわかる。

同様に、(25)の *nez* を見ると、ポルトガル語の *lápiz* のケースと同じように、フランス語の形態規則によって異形態 ϕ が付与されているため表層上は複数標識が見られないが、定冠詞の複数形 *os* の存在により複数の性質をもつことが分かるであろう。

また、次のように原語の表記が変化し始めているものもいくつか観察された。フランス語での単数形は *paillette*, *passerelle*, *salopette* であるが、連続する子音字のうち1字が脱落し、ポルトガル語への同化が進んだと見られる。し

たがってこれらは第2段階に属すと判断できる。

(28) As pailletes, não importa a cor de verniz escolhida, (...) (VP 15.67)

(29) E põem as passereles da Primavera/Verão num alvoroço. (VP 16.35)

(30) Salopetes em cetim de seda, (...) (VP 17.137)

上記の(28)と(29)の語に関して、(31)や(32)のように原語の表記を維持しているため第1段階に属すと判断できる用例も見られたが、複数の標示はいずれの場合でも同じであった。

(31) Fato de banho bordado com pailletes, (...) (VP 20.108)

(32) A modelo que investe todo o tempo livre nos jogos de póquer e que regressou às passareles (VP 14.81)

基本的にはフランス語の形態規則でもポルトガル語と同様に複数標識が-sで表されるため、いずれの言語から付与されたのか判断が出来かねる場合もあるが、(20), (21), (22), (25)の用例はポルトガル語の形態規則からでは導き出す事ができない形であったことから見ても、借用元言語の複数標識がそのままポルトガル語にもたらされたと考えてよいのではないかと思われる。しかし、それ以上に重要なのは、第1段階に属すと判断される外来名詞でもすでに複数標示が用いられていたということであろう。

3.3. 考察

このように、英語とフランス語起源の名詞の複数標識を見て来たが、大半の名詞が第1段階に属すと判断されていたにもかかわらず、すでに複数標識が付与されていたことが分かった。2節で見たように、修飾語との照応により名詞が複数の性質を持つと判断できるような用例は英語やフランス語起源の用例でもいくつか観察されたが、それらは2通りに分類できた。1つは借

用元言語ですでにゼロ形態であるもので、もう1つは本来であれば借用元言語でより規則的な複数標識が付与されるはずが、ポルトガル語に導入されてから外来語に対する躊躇といった心的要因が働いた結果ゼロ形態が選択されたものであった。いずれの場合も、その数はわずかであったことも分かった。この結果は、外来名詞がポルトガル語で用いられる際に、それが初めて用いられるものであったとしても、必ず無標か有標かの区別がなされ、有標の性質を持つ場合には、より規則的な複数標識かゼロ異形態のいずれかの複数標識が付与されるということを示していると考えられるであろう。後者の場合、既に2節で述べたように、その語には複数標識がないということではなく、複数の性質を有しているため、今後、規則的な複数標識が付与される可能性は備えていると言えるであろう。

今回調査の対象とした外来語は、いずれも文法範疇としての数を持つ言語に由来するものであったため、このような結果になったと言えるかもしれない。しかし、単数と複数の標示が任意である日本語起源の外来語がポルトガル語に導入される際にも同様のことが観察されているのである。以下は、ブラジルで2005年6月に発行された週刊誌 *Isto é* から抜粋した用例であるが、ここで用いられている語 *anime*, *otaku*, *manga*, *mangaká*, *tokusatsu* は、前述したいずれの辞書にもまだ記載がない。それぞれの語にイタリック体の使用は見られないものの、語義が文章中に定義されているため、同化の度合いが低いことが見て取れるであろう。それにもかかわらずすでに複数標識 *-s* が付与されていることは注目に値する。

1. Dependendo do grau de conhecimento, talvez sejam otakus, como são chamados os apaixonados por animes (desenhos animados) e mangas (quadrinhos).
2. Dona de uma vasta coleção de mangas, Giovana usa a internet para se manter atualizada e aprende japonês.
3. Há 12 anos no mercado, a JBC resolveu apostar no público de mangas no

Brasil em 2000 e saltou do 157º lugar para o 15º no ranking das editoras.

4. Os textos, lidos de trás para a frente, foram traduzidos do original, e não de uma versão em inglês, o que despertou o respeito dos otakus.
5. Mangakás são os criadores das histórias.
6. Em Julho, a terceira edição do Anime Friends, um dos mais movimentados eventos de cultura pop japonesa, trará para São Paulo quatro cantores famosos por interpretar temas de animes e tokusatus (série de teve como *Jaspion* e *Ultra seven*, popular nos anos 70). (*ISTO É*, 8/6/2005)

これらの用例からは確認されなかったが、文法数を持つ英語やフランス語由来の外来名詞と比較すると、日本語のように数の文法範疇のない言語から来る外来語に対する方が、使用者の心的要因が働く傾向は高いのではないかと推測される。つまり、ポルトガル語に導入された後、言語外的要因によりゼロ異形態が暫定的に選ばれる傾向が高いのは、借用先言語であるポルトガル語の言語体系から距離がある場合に起こり易くなるのではないかと考えられる。

それにもかかわらず、上記 1.から 6.のような用例が実際に用いられているということから見ても、借用元言語が数の文法範疇を持っていようといまいと、数の標識は外来語がポルトガル語に導入される初期段階で義務的に付与されるが、言語内的要因・言語外的要因により表層に現れる形式が異なってくるものと結論づけられるであろう。

4. おわりに

外来語の同化過程を3段階に分類した Mateus e Nascimento (2005)のモデルでは、他言語からポルトガル語に導入された名詞の文法性の付与と複数標識の付与は、前者が後者に先行する形で行われると解釈可能な記述がなされている。しかし、我々が英語とフランス語起源の外来語を対象に行った調査結果によると、上記モデルで初期段階に属すと判断される外来名詞でさえもす

でに複数標識が表出していたことが分かった。そして、その大部分は借用元言語の規則に基づいた複数標識であったことも確認できた。また、複数標識が表層に現れないゼロ異形態を伴った用例もほんのわずかであったが観察された。それらは借用元言語ですでにゼロ異形態を持っていたものと借用先言語で言語外的要因によりゼロ異形態が付与されたとされるものの2種類に分類できた。いずれの場合も外来語がポルトガル語の語彙体系へと同化が進んでいくにつれ、外来名詞の音や表記が徐々に変化し、ポルトガル語の形態規則にしたがって複数標識も変化してゆく可能性は考えられるであろう。

日本語のように数という文法範疇を持たない言語に由来する外来語がポルトガル語で用いられる際の複数標識についても3節で触れ、上記と同様の結果が見られたことを確認した。しかし、本稿では対象言語を英語とフランス語に絞ったため、日本語の用例については数量面において十分な調査ができなかった。そのため、今後は英語やフランス語以外の言語から名詞がポルトガル語に導入される際に、複数標識がどのように現れるのかをさらに追求していきたいと思う。

注

¹ 本稿は筆者の博士論文の一部を再分析し加筆・修正を加えたものである。

² ここでは他言語から借用される語は、その同化の程度がいかなる場合も外来語と呼ぶことにする。

参考文献

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一、『言語学大辞典 第6巻 術語編』,三省堂,東京,1995.
早川勇,「英語に入った日本語の同化度—1990年における—」,『言語と文化』愛知
大学語学研究室第13号,p.1-22,2005.

ベルント・ナウマン,『ドイツ語造語論入門』,石井賢治訳,三修社,2000.

村上陽子,「ボゴタの教養スペイン語における英語借用語の複数形」,『帝塚山学術論集』vol.9, p.75-89, 2002.

吉田光演,「ドイツ語名詞の単数に関する一考察」,広島ドイツ文学 22, p.1-10, 2008.

ALVES, Ieda Maria. Neologismo: criação lexical. 2. ed. São Paulo: Ática, 2002.

BIDERMAN, Maria Tereza Camargo. Teoria Lingüística. 2. ed. São Paulo: Martins Fontes, 2001.

CÂMARA JUNIOR, Joaquim Mattoso. Estrutura da Língua Portuguesa. 35. ed. Petrópolis: Vozes, 2002.

CASTELEIRO, João Malaca, (org.), Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea, Lisboa: Academia das Ciências de Lisboa / Editorial Verbo, 2001.

CORBETT, Greville G Number. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.

FERREIRA, Aurélio Buarque de Holanda. Novo Aurélio - Século 21. 3. ed. Rio de Janeiro: Nova Fronteira, 1999.

Grande Dicionário da Língua Portuguesa, 1ª ed. , Porto: Porto Editora, 2004.

HOUAISS, António. Dicionário Houaiss da Língua Portuguesa. Rio de Janeiro: Objetiva, 2001.

KEHDI, Valter. Formação de Palavras em Português. 3. ed. São Paulo: Ática, 2003.

MATEUS, Maria Helena Mira; NASCIMENTO, Fernanda Bacelar. A Língua Portuguesa em Mudança. Lisboa: Editorial Caminho, 2005.

MONTEIRO, José Lemos. Morfologia Portuguesa. 4. ed. Campinas: Pontes, 2002.

TORII, Rena. Os Processos de Integração dos Empréstimos Lingüísticos no Português. Tese (Doutorado em Lingüística) – Faculdade de Ciências Humanas, UNESP, Araraquara, 2007.

VOGUE BRASIL. n. 306 – 309, São Paulo: Carta Editorial, 2003-2004.

VOGUE PORTUGAK. n. 14 – 17, Lisboa: Edimoda, 2003- 2004.

ELLE BRASIL. n. 3 – 8, São Paulo: Editora Abril, 2004.

ELLE PORTUGAL. n. 186. – 191. Lisboa: Editora Proprietária, 2004.